

令和4年12月10日

言葉の処方箋

いい覚悟で生きる 樋野 興夫 P98

プロとして客観的な視点で自分をとらえる

プロたるもの、こんなことをしてはならない、と医療従事者も、がん患者さんも、誇りと気概を持ちましょう。

がん哲学外来メデカルカフェでは、患者さんや家族からの思いもよらない悩みを聞くことがあります。

たとえば、「この飲み物やサプリメントはがんに効くから、ぜひ飲みなさい」「この運動を毎日続けるといいですよ」といった余計なお節介に始まって、特殊な治療法を押しつけられたり、信仰の勧誘をされたりと、悩みはさまざまです。がん患者の一番の悩みは「病気や死への恐怖」と勝手に決めつけているから、その不安をなんとか軽減してあげたいと余計なお節介をするわけです。ただでさえ敏感になっている患者さんたちにとっては、わらをもすがる気持ちがありますから、受け入れなければ損することのように思ってしまうがちです。時には脅しにさえなります。

それ以上に気になることは、患者さんから話を聞く立場のボランティアスタッフもまた、ふだんの態度や言動が上から目線で押しつけになっていないか、ということ。患者さんへの心配りはなくてはならないものです。しかし、とくにプロであるはずの医療従事者の人たちが無意識のうちに陥りやすいことでもあるので、私は警鐘を鳴らすことが時にあります。

内村鑑三は「ゼントルマンの為さざるごと」という文章を残しています。ゼントルマン、つまりジェントルマンたるもの、こんなことをしてはならない、という戒めの10か条です。最近ではジェントルマンや紳士という言葉もめっきり聞かなくなりましたが、人の生き方としてひとつひとつ、心に響くものです。

これにならって、私は「プロの為さざるごと」5か条を考えました。というのも、今の世の中、プロフェッショナルに徹し、プロの誇りを持つ人があまりに少ないような気がするからです。

- 1 プロは人をその弱さに乗じて苦しめず
- 2 プロは人に悪意を帰せず
- 3 プロは人の劣情に訴えて事を為さず
- 4 プロは友人の秘密を公にせず
- 5 プロは人と利を争わず

プロフェッショナルとは思慮深く、一歩踏み込む胆力を持ち、根気よく仕事なり研究なりを続け、気概のある批判をする心を持っていなければなりません。がまん強く、丁寧な仕事を心がけ、最後には立派に完成するプロよ、出でよ、と切に願うのです。

医療従事者に限らず、今、病気と共存している人は、いつぞや病気のプロ、達人だと自分を受けとめてみるのはいかがでしょうか。プロとして客観的な視点で自分をとらえることは、苦悩さえも別の見方ができるように思うからです。加えて私が強く言いたいのは、ダブルメジャーのすすめです。衣食住のための職業や生活のためにだけ時間を使っているのは、人生いつかむなしくなります。自分の役割と使命感に燃えるライフワークをもうひとつ持つこと、それがダブルメジャーな生き方です。病気のプロであるならなおのこと、病気以外のライフワークを持つことです。闘病にはいやなことはいっぱいあるけれど、そこに並行して生きがいを求めるものがあれば結果として自分が救われます。私が本業の病理学とともにがん哲学外来をやっている意義もそこにあります。私は現在、文部科学省が管轄する「がんプロフェッショナル養成推進委員会」の委員でもありますが、がんが国民の死因第1位の疾患でもある今、「がん医療人の育成」と「がん教育」の普及は、日本国民の緊急課題であると痛感し、ダブルメジャーに奔走する日々です。

次回 2023年 1月14日(土)

区民ひろば清和第一

